

海外のオーケストラによる子どものための コンサートについての考察

～ベートーヴェンの作品を中心として～

加 納 暁 子

(長崎大学教育学研究科)

A study of the concerts for the children by the foreign orchestra
– Focusing on the pieces of Beethoven –

Akiko KANO

はじめに

2020年はベートーヴェンの生誕250周年であり、世界中で多くの記念演奏会が開催される予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大という災難に見舞われ、多くの演奏会が中止に追い込まれた。筆者は特にベートーヴェンに関連するワークショップに注目していた。以前から、大学生に模擬授業を課す中で、中学校の音楽科の教材として取り上げられているベートーヴェンの交響曲第5番「運命」は、指導の難しさを若干感じていた。もちろん、現場の中学校の教師は上手に指導されるのであろう。しかし、元々鑑賞の授業が受け身になりやすい傾向があること、標題はあるものの、例えば「ブルタバ」のように、曲の展開に合わせて、イメージが具体的に思い浮かべやすくはないこと、ハ短調という3つ付いている調性で、リコーダーで演奏し辛いことなど、授業を展開する上で、生徒にとっていくつかの障壁にあたってしまう。しかし、この曲はほとんどの人が耳にしたことのある名曲であり、多くのメッセージを持っており学ぶべき曲である。そこで、本稿ではシカゴ交響楽団の子どものためのコンサートから「**Bold voices**」¹⁾と「**Let's explore!**」²⁾を取り上げ、ベートーヴェンの交響曲第5番を中心とした学習の展開について考察する。

I Bold voices

シカゴ交響楽団では、ベートーヴェンのメモリアルイヤーに先駆けて、2019年11月22日に子どものためのコンサートを開催している。当日のプログラムは以下のとおりであり、すべてベートーヴェンの作品で構成されている。対象は小学生であり、コンサートホールに学校の先生が児童を引率して鑑賞する形式である。

プログラム

- ・ 交響曲第5番より第1楽章 (Allegro con brio)
- ・ 交響曲第1番より第4楽章 (Adagio-Allegro molto e vivace)

- ・ピアノ協奏曲第3番より第1楽章 (Allegro con brio)
- ・交響曲第3番「英雄」より第2楽章 (Marcia funebre: Adagio assai)
- ・交響曲第6番「田園」より第4楽章 (Gewitter, Sturm)
- ・交響曲第9番より第2楽章 (Molto vivace), 第4楽章 (Finale)

コンサートに先駆けて、教師用の指導ガイドが用意され、教師は予め児童に事前指導を行った上でコンサートに来ることが求められている。ガイドは2つのレッスンから構成されているため、それぞれ概観していく。

レッスン1：自分自身を表現する

レッスン1では、交響曲第5番より第1楽章、交響曲第3番「英雄」より第2楽章、交響曲第6番「田園」より第4楽章、交響曲第9番の第4楽章が取り上げられている。コンサートを通して考える本質的な問いは以下の3点である。

- ・音楽はどのように感情を表現するのか？
- ・ベートーヴェンの人生は、彼の音楽にどのような影響を及ぼしているのか？
- ・小さな楽句がどのようにして大きな音楽作品を作り上げるのか？

また、レッスン1を通して子どもたちに理解してほしい点を5つ挙げている。

- ・作曲家は小さな楽句を使って大きな音楽作品を作ること。
- ・音楽は作曲家や聴衆が感情を表現する方法であること。
- ・音楽はいつも物語を構成しているとは限らないこと。
- ・作曲家が音楽の中で表現を作り上げるために使用する音楽的な方法のリストを作る。
- ・ベートーヴェンを作曲家としてだけでなく、人として理解する。

① 交響曲第5番より第1楽章

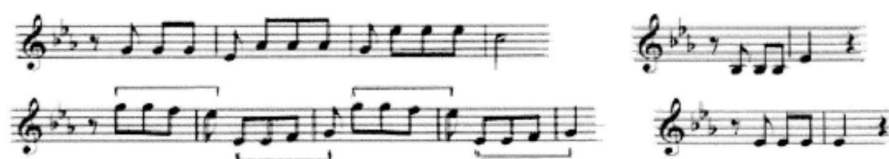
まず、交響曲第5番、第1楽章の基礎となっている4つの有名な音から始める。(譜例1)

譜例1



この4つの音が、提示部の中でどのように変化しているかに気付かせる（高い音，低い音，速い，遅い，背景になっているなど）この4つの音はモチーフと呼ばれる。このモチーフはいくつ使われているだろうか？（譜例2）³⁾

譜例 2



ベートーヴェンは感情を隠さない情熱的な人であった。しかし、彼の時代は音楽によって感情を表現するということはあまりなかった。彼は作曲を根底から変えて、魂を揺り動かし、人間が普遍的に経験するような感情を音楽で表現したことを子どもたちに説明する。

また、交響曲第5番の第1楽章をより深く理解するために、以下のような活動が提案されている。

- ・この音楽を聴いて感じた感情を、“How do you feel?”という図（参考資料1）を使って考える。そして音楽を聴きながら、子どもたちが経験した感情と一致する図を選ぶ。そして隣の人と、どのような感情の図を選んだのか、なぜ選んだのかを話し合う。
- ・楽譜（参考資料2）を用いて、ボディーパーカッションか、教室にある打楽器で交響曲の冒頭部分を演奏する。
- ・Listening Guide（参考資料3）をもとに、第1楽章を鑑賞する。
- ・ディズニーによる「ファンタジア2000」において、交響曲第5番を扱っている部分を視聴し、クレヨン、色鉛筆、水彩で音楽の印象について描いてみる。また、用紙に小さな正方形を描き、曲調に合わせて正方形を変化させながら描く活動が提案されている。

②交響曲第6番「田園」より第4楽章

コンサートでは全楽章を演奏するのではなく、第6番は第4楽章を取り上げる。まず、第5番と第6番の構成を比較し、異なる点について考える。

第5番	第6番
I. Allegro con brio	I. 田舎に到着したときの愉快的感情
II. Andante con moto	II. 小川のはとりの情景
III. Scherzo. Allegro	III. 田舎の人々の楽しい集い
IV. Allegro-Presto	IV. 雷雨・嵐
	V. 牧歌：嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち

子どもたちはプロコフィエフの「ピーターと狼」やデュカスの「魔法使いの弟子」など音楽に物語が付けられている作品は知っているかもしれないが、ベートーヴェンの時代に、交響曲が物語構成になっていることは斬新であったことを伝える。そして「雷雨・嵐」の楽章を聴き、ベートーヴェンがどのようにして嵐を作り出しているのか話し合う。考えるヒントとして、極端な強弱の使用（ピアノッシモからフォルティッシモまで）、テンポの変化、旋律の方向（音の上下）、使用楽器が挙げられている。一方で、ベートーヴェンはこの曲を通して音で自然を描写しようとしたのではなく、自然の中にいるときの感情を

表現しようとしていることに留意させ、嵐に遭遇したときの感情はどのようなものか共有する。さらに、この楽曲に対する学習を深めるために、ボディーパーカッションや打楽器を使用して嵐を表現したり、ディズニーの「ファンタジア」(1940)にある交響曲第6番を視聴する活動が挙げられている。

③交響曲第3番「英雄」より第2楽章

ベートーヴェンの時代以前は音楽によって心地よい感情をもたらす作曲家が多かったが、ベートーヴェンは弱さや不幸な感情をも音楽で表現しようとした。まず、冒頭のテーマを聴いて、子どもたちは感じ取った感情を書き留める。

ベートーヴェンは葬送行進曲としているが、1800年代、交響曲の楽章に葬送行進曲を含めることは新しい大胆な試みであった。そして、この楽曲を作曲したときの背景として、ベートーヴェンがウィーン近郊のハイリゲンシュタットに滞在し、聴覚障害が治らない現実を知った頃であることを伝える。従って、ベートーヴェンの楽曲は多くは希望に満ちたように終結するが、この楽章は悲しげに終わる。子どもたちには、この楽章を聴いて、これまで経験した辛かったこと、悲しかったことを絵に描いたり書いたりする活動を行う。(子どもたちの成熟度や精神状態に気を付けなければならない。)悲観的な感情に焦点をあてることは本来であれば回避したいが、人間にとって重要なことであることを伝える。

④交響曲第9番「合唱付き」より第4楽章

まず、「歓喜の歌」のテーマを演奏し、聴いたことがある人は手を挙げるように言う。(ベートーヴェンは、ドイツの詩人フリードリヒ・シラーの詩に感銘を受けて作曲した)そしてベートーヴェンはこの楽章でこれまで使ったことのない楽器を使っていることを知らせ、それは「人の声」であることを当てさせる。「歓喜の歌」の歌詞を英訳した楽譜をもとに、軽快な雰囲気を保ちながら歌唱する。(譜例3)

譜例3

Symphony No. 9's
ODE TO JOY

Ludwig van Beethoven
1770-1827
Original text by Schiller

Joy - ful, joy - ful, join our sing - ing. All be hold and know the truth.

With our mu - sic we are bring - ing free - dom to a - dults and youth.

All our sis - ters, all our broth - ers, all join hands, our love un - furled. Mu -

- sic brings us all to - geth - er. Mu - sic's pow'r will change the world.

途中、12, 13小節目ではシンコペーションのリズムがあるため注意するとともに、単純な（シンコペーションのない）リズムと歌い比べて、ベートーヴェンの非凡な工夫について感じ取らせる。コンサート当日には、最初にチェロとコントラバスがテーマを弾き始め、オーケストラによるヴァース（コーラスに入る前の導入部）が2回繰り返される中で楽器が増え、4回目に金管楽器が入る部分で子どもたちが合唱で加わる構成を取る。更に、オリジナルのドイツ語による演奏も聴き、オーケストラに大合唱が加えられることによって、ベートーヴェンは聴いている人にどのような感情を経験してほしいのか考える。

レッスン1のまとめとして、ベートーヴェンは当時の音楽の規則を変化させ、大胆に作曲し音楽界を変えていった。そして音楽を通して計り知れないほどの広範囲にわたる人間の感情を音楽で表現しようとしたことを理解する。

レッスン2：どのような計画か？

レッスン2では、交響曲第1番より第4楽章、交響曲第9番より第2楽章、ピアノ協奏曲第3番より第1楽章が取り上げられている。（コンサートのプログラム順ではない。）また、コンサートを通して考える3つの本質的な問いはレッスン1のものと変わらない。

レッスン2を通して子どもたちに理解してほしい点は以下の3つである。

- ・小さな楽句が繰り返され変化することによって音が組織化され、音楽になることを認識する。
- ・音楽は繰り返されるだけでなく、楽句を対照的にしたり、予期せぬ変化を起こすことにより、聴いている人を楽しませる。
- ・音楽におけるゼクエンツ（音高が変化する反復進行）の概念を理解し、世界は反復に溢れているという考えに発展させる。

⑤交響曲第1番より第4楽章

まず導入として、交響曲ではなく「エリーゼのために」を聴かせて、主題が繰り返されるところで体を同じように動かすように指示する。「エリーゼのために」は誰が作曲したのかを子どもたちに尋ねてみる。そして慣れ親しんでいるものや大好きな食べ物などを繰り返すことは快感や楽しみをもたらすものであり、ベートーヴェンは音楽で繰り返しを使用する天才であることを伝える。

第4楽章の冒頭、1st ヴァイオリンの以下のような旋律の中に、どのような繰り返しがあるか注目させる。（譜例4）

譜例4



この旋律のパターンにおいて、一つの音から始まり、音が加わって高くなることに気づかせる。そして、算数のパズルで1,2,3-2,3,4-3,4,5-4,5,? や、1,3,5-2,4,6-3,5,7-4,?,? といった数列を考えさせ、音楽においてこのようなパターンをゼクエンツと呼ぶ。また、4

楽章内にみられる4つの旋律パターンを提示し、どの部分がパターンとして繰り返されているか指摘させる。(譜例5)⁴⁾

譜例5



このような繰り返しを音楽においてはゼクエンツと呼び、子どもたちに繰り返しやゼクエンツを体で表現する活動を行った後、再度第4楽章を鑑賞する。

⑥交響曲第9番「合唱付き」より第2楽章

前述の交響曲第1番の第4楽章は、予想がつくゼクエンツであったが、音楽はいつも予想がつくわけではなく、驚きや道理に合わないことも起きうる。ベートーヴェンは交響曲第9番の第2楽章では、2つの動機を巧みに、かつ極度に繰り返し用いている。(譜例6)

譜例6



そして4小節毎に楽器が加わり、楽器同士が会話をしているようである。



子どもたちにもこのリズム動機を演奏させるが、非常にテンポが速いことに気を付ける。そして、この同じパターンをオーケストラで用いられる楽器の絵を見せながら、どの楽器群が演奏しているかを確かめ、仲良くしているようなのか、競争しているようであるかを考える。そしてこの楽章でも特に意表を突き、執拗さが目立つ楽器としてティンパニにも注目させる。また、この楽章から察するベートーヴェンの性格を想像させる。(大胆、勇敢、執拗、頑固等)

⑦ピアノ協奏曲第3番より第1楽章

この作品は1803年、ピアノのソロはベートーヴェン自身によって初演された。もうその

頃は聴力を60%ほど失っていたと言われている。ベートーヴェンは当時ピアニストとしても名声を確立しており、初演の日にはまだピアノパートは完成しておらず、本番直前に書き上げたと言われている。1787年、ベートーヴェンは16歳のときにウィーンでモーツァルトに出会い、この曲はモーツァルトのピアノ協奏曲第24番の冒頭とよく似ており、敬意を表していると思われる。子どもたちには、交響曲と協奏曲の違いを認識させる。交響曲は普通4楽章から構成されるが、協奏曲は3楽章で構成されることが多く、オーケストラの伴奏に、楽器のソリストが演奏する形式であることを理解させる。第1楽章の最後には、カデンツァと呼ばれる部分があり、ソリストが一人で自らの技能を披露する部分がある。コンサートではオーディションで選ばれた高校生がソリストを務めることになっており、コンサートを聴く子どもたちにも年齢が近いので、親近感が得られ励みになるであろう。

II Let's explore !

次に、ベートーヴェンの交響曲第5番を異なる観点から捉えたコンサートについて概観する。シカゴ交響楽団によって2018年3月16日に行われた「Let's explore !」と題したコンサートの中に交響曲第5番が扱われている。プログラムは以下のとおりである。

プログラム

G.L. フランク作曲「3つのラテンアメリカ舞曲」より「メスティーズワルツ」

ベートーヴェン作曲「交響曲第5番」より第1楽章

スメタナ作曲 交響詩「我が祖国」より「モルダウ」

M. バイツ作曲「砂漠飛行」

このコンサートでは、音楽の諸要素を分析することにより、どのように自然現象が音楽によって表現されているのか、また音楽の要素を標本や化石に見立てて、楽曲の調査、探検を行う設定になっている。

⑧ ベートーヴェン「交響曲第5番」より第1楽章

まず、ベートーヴェンの人生に関するビデオを視聴し、以下の点から作曲家に関する調査を行い探検記録（ワークシート）に記入する。

- ・彼の性格はどのようなものであったか？
- ・彼の才能はどのようなものであったか？
- ・彼が直面した挑戦とは何か？
- ・ベートーヴェンはどのような探検家であったか？
- ・彼はどのような新しい発見をしたか？
- ・彼が音楽史に残した永遠の印象と寄与とは何か？

次に、第1楽章の冒頭を鑑賞し、観察し発見した音楽の特徴を標本として観察記録に記入させる。その際、より高いレベルの思考を引き出すために、以下のような提案を行う。

- ・音楽の標本についてどのような観察結果が得られたか？
- ・作品を通して「短－短－短－長」という音のパターンを聴くことができたか？

- ・ 作品の中で「短－短－短－長」というパターンを何回数えることができたか？
- ・ 音楽の歴史家はこの標本からベートーヴェンについて何を学ぶか？
- ・ この冒頭のリズムは、なぜ有名で記憶に残るものになったのか？

観察した結果を友達と共有し、次に初めてベートーヴェンの交響曲第5番を発見した研究者になったつもりで、「短－短－短－長」を視覚的に表現する。繰り返し、強さ、明暗、直線とぎざぎざの線、重なる形やデザインを用いて、メロディーを表現できる方法を探究させる。そして再びスケッチを友達と共有する。

このコンサートにおいて、交響曲第5番の前後の関係性を明らかにするため、プログラムの他の楽曲についても概観する。

⑨G.L.フランク作曲「3つのラテンアメリカ舞曲」より「メスティーズワルツ」

Gabriela Lena Frank は1972年生まれのアメリカの作曲家である。彼女の母親がペルーと中国の家系であったため、南アメリカで様々な文化（詩、神話、音楽）を収集し、作品に取り入れた。「メスティーズワルツ」にはペルーの音楽やロマンセというスペイン語による詩や歌が反映されている。子どもたちには曲を聴かせ、どのような楽器が使われ、その楽器からどのようなペルーの動物が想像できるか、またテンポやメロディーからペルーの伝統行事や遺跡について想像する。さらに、音楽を聴いて、詩や物語を考えたり、絵画に表す活動へと発展させる。

⑩B.スメタナ作曲 交響詩「我が祖国」より「モルダウ」

自然やその周りにあるものについて音楽で表現している曲として、「モルダウ」が挙げられている。子どもたちには、木から落ちた雫が小さな流れとなり、森、村人の結婚式、城の傍を、形を変えながら川が流れていく様を説明する。そして、子どもたちは音楽を聴きながら、各々の場面に合わせて、体やリボン、スカーフを使って表現させる。この曲は、日本では中学校の音楽科の教材として取り扱われ、音楽の構成要素や曲想など、もう少し詳細に学習するが、この事前学習は小学生が対象であり、自然をテーマとした曲を知るという目的のため、簡潔に取り扱われている。

⑪M.ベイツ作曲「砂漠飛行」

Mason Bates は1977年生まれのアメリカの作曲家である。この作品はヘリコプターで砂漠上空を飛び、上空から見た壮大な景色が映画音楽のような音響で表現されている。砂漠のヘリポートを飛び立つときから音楽が始まり、翼の回転が次第に速まり、作品の前半は鳥の鳴き声を想像させるような賑やかな曲想であるが、後半からはインディアンの神聖な空間へ移動し、長い音価で壮大な曲想へと変化していく。子どもたちにはヘリコプターになったつもりで、教室の中を動いたり、スメタナの「モルダウ」との比較をさせる。また、探検をテーマとした課題であるため、その後「絶滅危惧種の植物を探す」というテーマで、音楽作品の創作活動へと発展させる。

考察

シカゴ交響楽団による子どものためのコンサートより、ベートーヴェンの作品のみに絞ったプログラムと、「探検しよう！」という全く異なる切り口からベートーヴェンの交響曲第5番を扱っているプログラムに関する事前学習について概観した。ベートーヴェンのみのプログラムにおいては、レッスン1では感情をテーマに、レッスン2では構造をテーマにしており、両要素ともベートーヴェンを理解する際には重要なテーマである。また、探検をテーマとしたプログラムでは、アメリカの現代作曲家の作品とクラシックの作品を取り入れ、両者のよさや違いを感じ取る流れになっている。

現在、中学校の教科書では交響曲第5番が教材として取り上げられている。その中では、ソナタ形式について学び、第1主題と第2主題の対比による知覚と感受、また4つの音から成る楽句が冒頭や第1主題のみならず、第2主題にも随所に現れている点に注目させる。これらの指導内容に、参考資料2のようなアンサンブルを取り入れると、より楽句の繰り返しや積み重ねによって一つの音楽が構成されていることを実感できるのではないかと考える。また、参考資料1も様々な感情がイラストと共に示されている。第1主題と第2主題を比較すると、暗-明や厳-穏といったコントラストが予想されるが、参考資料1を用いることによって、普段は意識しないようなより細やかな感情に気づき、音楽の表現について深く感じ取ることができるのではないだろうかと思う。また、探検という切り口から考えるなら、4つの音から成る楽句が何回出現するか数える活動がよく行われるが、参考資料3のような図形的なスコアを用いて視覚的に探していくと、演奏される楽器や楽句、主題の変化、全体的な構成も理解できるであろう。

また、ベートーヴェンのみのプログラムでは非常に多角的な視点から5番以外の交響曲を取り入れることによって、ベートーヴェンの幅広い表現の世界を感じ取らせている。このプログラムの中で、学校の限られた授業の中で、交響曲第5番と組み合わせて指導するならば、第6番「田園」か、第9番の第4楽章が適しているであろう。第6番「田園」は第5番と作曲時期が非常に近いが、印象や構成は全く異なる。なぜ、同時期に性格の異なる交響曲を作曲したのかを考えると、ベートーヴェンの作曲背景や人となりから学習できるであろう。第4楽章の「雷雨・嵐」は、ヴィヴァルディの協奏曲「春」にも嵐の部分が出現するが、既習のヴィヴァルディとの比較も考えられる。また、第9番の第4楽章についてはオーケストラと一緒に歌うという経験に勝るものはないが、実際旋律を歌ってみたり、ハ長調に移調してリコーダーで演奏することも可能であろう。

本稿では、ベートーヴェンの作品を中心に考察したが、交響曲第5番は、ベートーヴェンの音楽構成をよく表している作品であると同時に、人間としての生き様や様々な感情の推移を感じ取ることができる。鑑賞教育も長年の研究により、受け身の授業であることはかなり少なくなってきたが、パターン化したり予測可能な学習になるのではなく、常に新しい切り口や様々な活動を通して言葉には表しきれない表現を感じ取る力や全身で音楽を感じ取る力を発展させることが必要であろう。

注

- 1) <http://cso.org/institute/schools-teachers/> より teachers_guide_1_boldvoices
- 2) <http://cso.org/institute/schools-teachers/> より teachers_guide_lets-explore

- 3) 譜例2の左上は、6～9小節目のセカンドヴァイオリン、ヴィオラ、ファーストヴァイオリンのメロディーの繋がり、左下は14～18小節目のファーストヴァイオリンとセカンドヴァイオリンの掛け合い、右上は65～66小節目のチェロやコントラバスの旋律、右下は158～159小節目のホルンの旋律。
- 4) 譜例5の1は14～22小節目のファーストヴァイオリン、2は41～46小節目のファーストヴァイオリン、3は64～70小節目のファーストとセカンドヴァイオリン、4は88～93小節目のセカンドヴァイオリンの旋律。

(参考資料 1)



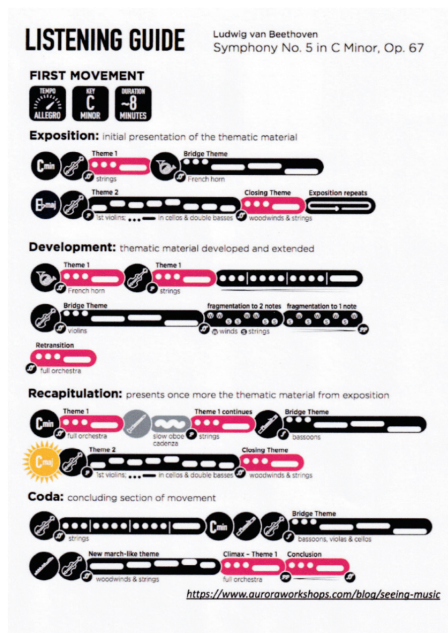
顔の表情を表したイラストとともに、多様な感情が提示されている。

(参考資料 2)



交響曲第5番、第1楽章の冒頭から21小節目までを、4つの音のモチーフを中心に3声のアンサンブルとして編曲した楽譜。

(参考資料 3)



ソナタ形式の構造に沿って、演奏される楽器や旋律が図形によって表されている。

